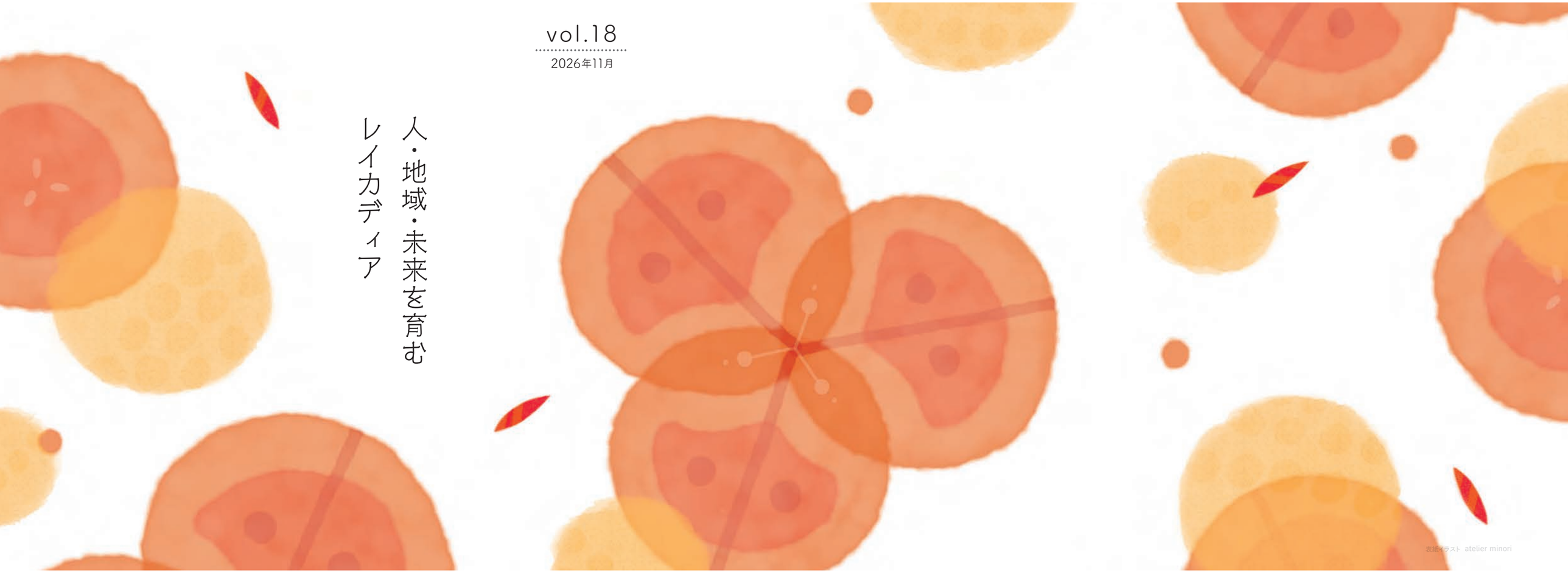
社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌

季刊 ひたすらなるつながり

vol.18
2026年11月



人・地域・未来を育む
レイカディア

寄稿〈01〉福祉論壇
調べられることは覚える必要はない
―AIの時代の対人支援
NPO法人抱樸　奥田 知志さん

特集〈02―08〉
『レイカディア』が育む人・地域・未来
（社福）道 理事長　柴田 惠子さん
中央まちカフェてきてく　木村 健治さん
たかしまT・キッチン　木村 正美さん
ちゅうず子ども食堂　田中 修さん
ドローンクラブ　米川 哲史さん

連載〈08〉しがの健康とスポーツ フライングディスク
連載〈09―11〉えにしのたね えにしのめ
とよさとまちづくり委員会
とよさと快蔵プロジェクト
あすなろ福祉会

コラム〈12〉おすすめの映画と本
映画「90メートル」ほか

連載〈13―14〉福祉の政策と生活 #08
こども誰でも通園制度
滋賀県子ども若者部 子育て支援課

連載〈15―16〉わたしとふくしのはなし
（社福）絆敬会 ここのっす園 園長 菊田 津多江さん

連載〈17―18〉私たちのふくしゴト
建築士 市川 真理さん

連載〈19―20〉県社協レポート
八日市南高等学校 地域支援活動部

寄稿〈22〉しが福祉論壇
次世代ケア推進センター
虫の目・鳥の目・魚の目＋〇〇目
大津市社会福祉協議会　井ノ口 浩士さん

表紙イラスト　atelier minori

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌
季刊 ひたすらなるつながり
2026年11月16日発行
通巻18号
発行人 市川 忠稔
〒525-0072 草津市笠山七丁目 8-138
社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会



NPO法人抱樸 理事長
東八幡キリスト教会牧師
奥田 知志さん

ふくし
福祉論壇
ろんだん

「調べられることは覚える必要はない―AIの時代の対人支援」

北九州で路上に暮らす人々への支援が始まったのは1988年。パソコンが普及する7年前。
当時の北九州市は生活保護の水際作戦が行なわれ、申請権の侵害が問題になっていた（現在、改善され公正に手続きが行われている）。役所との交渉は「素人」の私達には大変だった。何しろ知識が足らない。片手に「生活保護手帳」、片手に「生活保護問答集」を携え役所に向かう。知らないと交渉できない。「教授」と呼ばれた方がいた。野宿生活をしながら図書館に通い生活保護制度を熟知していた。「それについては保護法何条にこうあります」とか「問答集でこのように説明されています」と役人が舌を巻くほどの知識だった。まさに生きるための学びと言えた。
デジタル技術の進歩はその後革命的だった。スマートフォンが登場し、今や片手に百科事典を持っているような時代となった。解らなければその場で調べれば良い。
相談支援員の仕事は、アセスメント（分析・評価）、主訴の確定、個別支援計画を立て、必要な制度につなぐこと。特に支援計画立案には「知識」は不可欠。不勉強な支援員にあたると使える制度も使えない。法律も制度も刻々と変わるのでなおさら勉強は欠かせない。
かつてアインシュタインは「調べられることは覚える必要はない」と言った。生成AI（人口知能）の登場で瞬時に調べることがますます可能となった。となると支援員がこれまで大前提としてきた「学び」はどうなるのだろう。
生成AIが支援計画をつくる。しかも最新情報に基づき的確に。そうなれば支援員は不要になるのか。そうはならない。今後支援員は「最も大切な仕事」に集中することになる。相談者の気持ちに寄り添い、失意のうちに打ちひしがれた人が「もう一度生きよう」と思うために何をすべきかを考え悩む。AIの立案する計画がどれほど緻密でもご本人が「その気」にならないとそれは紙きれで終わる。
養老孟司は「教養はものを識ることとは関係がない。やっぱり人の心がわかることというしかないのである」と語る。支援員の最も大切な働きはこの「教養」を身につけることにある。伴走し、その人の思いを想像し、悲しみや苦しみに思いを馳せる。「感情移入してはいけない」などと言っている場合ではない。感情こそがAIと支援員の違いだ。泣く者と共に泣き、笑う者と共に笑う。その人がその気になるまでゆっくりと付き合う。時の移ろいの中でフェーズが変わっても大丈夫。AIが一瞬にして改定プランをつくってくれる。だから、支援員は、どんと構えて人しかできないことをやれば良い。知識ではなく「教養」こそが対人支援の本質なのである。

奥田 知志（おくだ ともし）／1963年生まれ。関西学院大学神学部修士課程および西南学院大学神学部専攻科卒業。九州大学大学院博士課程後期単位取得。1990年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代から始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。事務局長等を経て、北九州ホームレス支援機構（現、抱樸）の理事長に就任。これまでに3,700人以上のホームレスの人々の自立を支援。

lacadia
『レイカディア』が育む 人・地域・未来
～つながりが生み出すものとは～

今、仕事や子育てを終えた後も、
自分の経験や楽しいと思うこと、興味・関心を生かしながら、地域や社会とつながり自分らしく「人生を生きる」人たちが「レイカディア」を育む人として、地域に新しい活力をもたらしています。
レイカディアを象徴する人たちの姿から、「自分らしく生きること」「人との出会いが生み出すもの」「地域に出番があること」「未来につなげること」を見出し、人・地域・未来のつながりが生み出すものについて考えます。

『レイカディア』とは…

「レイク（湖）」と古代ギリシアの理想郷「アルカディア」を組み合わせた滋賀県オリジナルの造語。「湖の理想郷」の意味を込めた滋賀県が目指す豊かな長寿社会・共生社会のシンボルです。

滋賀県社会福祉協議会では、60歳以上対象の2年制シニア大学「レイカディア大学」を運営しています。卒業後、地域の担い手として活躍することを目指して、園芸や健康、地域文化などを学びます。
今回の特集では、レイカディア大学卒業生にもインタビューしています。
（05ページ：木村健治さん・正美さん／07ページ：米川哲史さん）



社会福祉法人 道　理事長
看護師　柴田 恵子さん

2014(平成26)年3月に勤務していた病院を退職し「訪問看護ステーションふれんず」を立ち上げる。その後、医療的ケアを必要とする子どものための「ふぁみりぃ」(児童発達支援・放課後等デイ・生活介護・療養型介護)、相談支援事業所「ちゃれんじ」を立ち上げ、地域包括ケアステーション「森のお家」を開設。今年4月に開所した生活介護事業所「すまいる畑」では、スープカフェや暮らしの保健室を始めるなど、地域に開かれた施設づくりに取り組んでいる。

終末期医療から訪問看護ステーションへ

看護師になって52年。病院に勤務していた頃、がん患者の緩和ケアに携わっていました。高齢の終末期の患者さんが、外泊されたのを機に、自宅に居ることを望まれ、そのまま家で穏やかな最期を迎えられました。その後、訪問看護ステーションへ異動となり、ホスピスケアを大切に、多くの方々の在宅看取りに関わらせていただきました。病院ではできない、本人の望みを聞き、寄り添い、住み慣れたところで最期を迎えるお手伝いをしました。

59歳で病院を退職し、看護師仲間6人で「訪問看護ステーションふれんず」を立ち上げました。


誰もが自然に過ごせる交流カフェスペース

医療的ケア児・者と出会って

ふれんずを立ち上げてからは、在宅での看取りの利用者だけでなく、医療的ケアを必要とする子どもの在宅支援をすることになりました。家族は、24時間子どもの命をつなぐことにいっぱいいっぱいで余裕が持てず、なかなか外出もできない。「この子の生活は家だけじゃないはず」との思いから、医療的ケア児の通所施設「ふぁみりぃ」を立ち上げました。

そんなある日、ご家族からこんなことを言われました。「子どもに『ふぁみりぃ』に行くと伝えると笑う」と。「いやいや、そんなことないだろう」と思っていましたが、他のお母さんからも同じことを言われました。ちょっと信じられなかったけれど、何日か見ていると、たしかに子どもの表情が穏やかな感じになっている。子どもたちにとって自分の居場所があることが、いかに大事なのか実感しました。

最初は、一番そばにいる私たちが助けなければ、手伝いをしなくては、という考え方でした。でも今は、支援するのではなく一緒に成長させてもらっている感覚です。利用者さんにとって何が一番良いのかをみんなで探りながら、その人に合った形を考えていく。それをスタッフも一緒に楽しませてもらっています。一緒に生きているというか、本当に元気をもらっています。

そして、一緒にふれんずを始めた6人の仲間が、まだみんな生きている(笑)。みんな一緒に働いています。みんなつながって、みんなで一緒に年をとっているから年齢を忘れちゃう。お互いに元気をもらっています。

スープが育む混ぜ混ぜの地域

ふぁみりぃと同じく医療的ケア児・者の通所施設「すまいる畑」は、地域に開かれた出会いと交流の場を目指しています。施設内のコミュニティースペースで「森のすまいる保健室」を開き、利用者らが育てた野菜でつくったスープを目玉にカフェも始めています。また、すまいる畑を地域の活動の場として、「公民館」みたいな「民民館」として利用していただきたいと思っています。

この「すまいる畑」でイベントを開催して、いろんな方にうちの利用者さんたちと触れ合っていただくことは地域にとっても大事なことだと思っています。利用者さんを見て、もしかしたら「かわいそう」「本当に来ていいのですか?」とおっしゃる方もいるかもしれません。でも、スタッフや利用者さんの楽しい笑い声を聞いたら、かわいそうだと思わなくなるでしょう。

カフェではまぜまぜスープを出しています。地域の方がここに来てスープを飲んで「おいしいね」と言って、みんなが同じ空間にいることで自然に混ざっていく。障害のある人もない人も、一緒に生きて、集っていく、それが当たり前、そんなところになればいいなと思いながらやっています。


テラスの花壇にはスープの材料になる野菜

「道」は続く

訪問看護の利用者さんの家に道の絵がありました。道って続くから道なんだ、続かないと道じゃないんだよとご家族から言われました。

私たちがいなくなって、うちの事業所がなくなってしまったら、この方たちはどうなってしまうのか、この人たちと一緒に生きていくと決めたからには続かないとダメ。私が終わっても次の人たちで続く「道」を目指して、NPO法人から社会福祉法人への転換を決めました。社会福祉法人になれば次の人たちも運営しやすいだろう、そんな思いから市の協力や関係者の支援を受けながら社会福祉法人を立ち上げましたが、本当に大変でした。仕事のできる事務の方がいなかったら、とてもじゃないけどできなかったと思います。

看護師である私の原動力

利用者さんは、つらい手術を何度も受けたり、お薬をたくさん飲み続けたりしながら生きています。一生懸命生きる人たちと一緒に居られるのは、ある意味、私の原動力かもしれません。

看護師として、人の人生の最期をたくさん見てきました。その中で、その人らしさってなんだろう、自分らしさってなんだろう、とずっと自問自答してきました。でも今、自分が72歳になり、自分の好きなこと、自分のしたいことをできること、自分のしたいことをする、もうそれでいいのかなって思うようになりました。それを利用者さん、スタッフ、地域の人と一緒にさせていただく、それが力になっています。

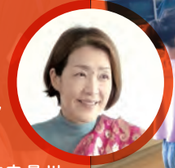
「看護」って何かいまだにわからないこともありますが、今私がやっていることは、全部看護だと思っています。看護にこだわって、手と目で人を護ることを自分は死ぬまでやっていくんだろうし、看護師として一生は終えたいなと思っています。







中央まちカフェてきてく
代表 木村 健治さん



たかしまT・キッチン
責任者 木村 正美さん

退職後、2024年から高島市安曇川の自治会のない地域で「中央まちカフェてきてく」を運営する夫・健治さん。移動型子ども食堂「たかしまT・キッチン」も開始し、食を通じた子ども・地域とのつながりづくりに取り組む妻・正美さん。「てきてく」は、「一滴の雫から輪が広がるように、地域の人がてくてくと歩いていける居場所をつくりたい」という思いから。

きっかけはレイカディア大学

健治さん▼▼▼

レイカディア大学の授業で、子ども食堂のボランティアに行くことになり、妻を誘って参加しました。それがきっかけで、自分たちの住んでいる町にも困難を抱えている子どもがいることを知りました。レイカディア大学の卒業を控えた頃に高島市社協の職員から「地域でカフェをやって、人のつながりをつくってほしい」と言われて始めたのが「中央まちカフェてきてく」です。

民生委員を引き受けてからは、妻も一緒に見守り登校支援をするようになり、近所の子どもと顔見知りになりました。そんな中、公民館では近場の子どもしか来られないので、要請のあるところにこちらから出向く出張型の子ども食堂をやってはどうか、という話になりました。それが「たかしまT・キッチン」です。

安曇川住民福祉ネットワークに所属して、いろいろな地域の課題や子どもたちが抱えている問題を知りました。今は、安曇川に限らず、高島市内のいろいろな場所に出張しています。隣町の子ども食堂さんに夫婦で話を聞きに行ったり、手伝ってもらったり、協力しあっています。

移動型子ども食堂

正美さん▼▼▼

食を通じた支援で子どもたちにおなかいっぱいの満足感を提供したい、1食でも子育て世代のお母さん方の負担を減らしてあげたい、地域みんなでつながったらいいなという思いでこども食堂「たかしまT・キッチン」を始めました。

最初は、介護施設の一室で実施していた中学生の学習支援室に来ている子どもたちへ軽食を提供しました。当初は小さいおにぎりだったのが、徐々に寄付などもらうようになったのですが、いろいろな事情があって半年ほどで中断しました。

今は、少人数の学習支援室として軽食支援も再開しています。また、中学校の校長先生から、朝に子どもたちにおにぎりを提供してほしいと言われ、朝6時から学校の調理室で、保護者や地域の方と10人ぐらいでおにぎりをつくって、子どもに食べてもらっています。長期休暇中には学童保育所へカレーを提供しています。中学生たちは、調理や配膳のボランティアに参加してくれています。T・キッチンののぼり旗も中学生の手づくりです。

とりあえずやるしかない

正美さん▼▼▼

普段の生活では見えなかったものが、こうした活動をしているといろいろ見えてくることがあります。食べられない子どもがいるとか、家族や地域の問題、これらを知ってしまった以上、とりあえずやるしかない。やってみてあかんかったらやめたらええやん、と思っています。

健治さん▼▼▼

多くの人の支援や協力があり、感謝の気持ちでいっぱいです。この活動を始めてから、自分自身も元気になっているようで、今年は風邪もひかなかった。逆に子どもから元気をもらっているのだと思います。楽しくやらないと続かないし、やっぱり自分自身がある程度楽しめないといけないですね。



ちゅうず子ども食堂 代表
保護司 田中 修さん

保護司をしながら、野洲市で中主小学校の子どもたちを主な対象とした「ちゅうず子ども食堂」を2016年から運営。みんなの家から少しずつ出し合って必要な家庭に届ける「おすそわけ運動」、子どもがいる家庭に食を届ける「子ども宅食」の活動など、70代になってからも新しい取り組みを次々に始めている。

保護司の経験から子ども食堂を開始

私は元々、金融機関に勤めていました。新店舗の開店に際し、駅から店までの道路上にたばこの吸い殻が捨てられている光景に問題意識を抱きました。そこで、地域との関係づくりとして街路樹に缶をくくりつけて吸い殻入れを設置したことが地域づくりの活動を始めるきっかけでした。

金融機関を30代で退職後、近所の寺の住職から「保護司になってほしい。保護観察所には届けたから」と半ば強引に言われて保護司になることに。その活動を続ける中で、ある時ご飯を食べていない子に出会いました。夜になっても両親は帰らず、本人は空腹でフラフラしていました。「これはなんとかしなければならない」と思っていた時に、偶然新聞で子ども食堂の記事を見て、開設へ向けて動き出しました。この頃やっていた会社は息子に任せて、地域の子どものための活動に専念するようになっていきました。

ちゅうず子ども食堂は、中主小学校またはコミュニティセンターなかさとで月に1回開催しています。開設当初は、「あそこに行っている子どもは貧しい」という大人もいました。しかし、その子が貧しいとどうしてわかるのか、何をもって貧困とするのか。子ども食堂は、放課後にみんなで一緒にご飯を食べる場であり、思いっきり遊べる場として子どもたちの居場所となっています。ボランティアとして大学生も協力し、地域の人のつながりを大切にする場となっています。

おすそわけから広がる支援の輪

コロナ禍では、食材が足りなくなり「どうしよう」と悩んだ末、おすそわけ運動を思いつきました。全世帯にチラシを配って物資提供の協力をお願いしたり、農家さんへお米を分けてもらえないか直接交渉に行ったりもしました。今は、その活動を続ける中で、行政も一緒に活動することも増えてきました。

子どもにはにこやかに笑っていてほしい

今後は、学校・地域・福祉の連携に取り組み、子ども宅食に力を入れていくつもりです。子どもに継続して食材を届けることで、複雑な家族の状況がわかり、心を開いてくれる家庭も増え、そこから立ち直ってNPO法人を立ち上げた子もいます。

課題のある家庭の子はどこか影があるように見えるし、子どもがおかれた環境を思って涙が出ることもあります。子どもに罪はないし、子どもの責任ではなく環境の責任だと思います。子どもはにこやかに笑っていてほしい。自分自身が食べていけない時代も経験した上で、保護司として様々なケースを見てきたからこそ、そう思います。

子ども食堂などを通じて、つらい環境におかれた子どもを社会が救わなければならない。学校や行政と福祉の連携は容易ではありませんが、つながりを広げることの大切さを多くの人に伝えたいと思っています。



ドローンクラブ　元代表
米川 哲史さん

レイカディア大学に入学した2023年、大学の仲間と意気投合しドローンクラブを創設。今や、学生や卒業生を合わせて60名超の大所帯に。ボランティアセンターに登録してドローン撮影の活動も開始し、活動は広がりを見せている。

ドローンクラブ創設

60歳で定年退職し、急に暇になりました。滋賀には転勤で来たので、仕事関係の人以外は知り合いもいなくて、まずいなという感じがありました。そんな時に応募したのがレイカディア大学で、それが大正解。とにかく知り合いが増えて、近所でも道端でも出会う。これは非常にいいなと思いました。

最初の授業で自己紹介をした時に、クラスメイトの1人がドローンをやっていると言っていて、私もやっているよという話をしたら、もう1人興味ある人が食いついてきて…。さらに別の学科の1人が加わって、合計4人でクラブを立ち上げました。

勧誘活動の中で、飛ばしたドローンが自分のところに戻ってくるデモンストレーションを部員の女性がしてくれたのですが、なかなか戻ってこない。あまり上手でなく、会場から笑いが出ていました。でも逆に、これならもと思ってもらえるかもしれないと思って、女性の入部が増えたようで、女性の方が多いです。

ドローンとの出会い

コロナの真っ最中にドローンを1台買ってやってみたら思ったより高性能なことに驚きました。GPS機能がついていて、見失っても自分で戻ってきたり、センサーがついていて障害物をよけたりと、思った以上に賢い。本格的なものは、広角と望遠レンズがついていたり、手ぶれ補正機能がついていたり、また撮りたいところをプログラミングしたら、勝手に飛んでいって撮ってくることもできます。ちょっとした高級おもちゃです。上空から見る映像は、本当に楽しいです。

ドローンが結ぶつながり

現在ドローンクラブの登録数は60名程度。普段は、体育室に椅子を並べてつくったコースを飛ばして競争したり、技術を磨いたり、それぞれ楽しんでいます。

登録している大津市ボランティアセンター経由で撮影の依頼も入ります。上空からの撮影がだんだん法的に厳しくなってきているので、土地や建物管理者からの依頼でドローンを飛ばせる機会が提供される撮影依頼はWin-Winな関係です。最近はドローンに興味のある30～40代の若い方からもボランティアセンターを通じて連絡が来ることもあり、ドローンを通じてつながりがどんどん広がっているのも面白いなと思っています。

やってみたい精神

若い頃、青年海外協力隊でフィリピンに2年間行きました。世の中こんな違う世界があるのかと、人生観が変わりました。

以来「何か迷ったらやってみよう」というのが、私のポリシーです。やっておけばよかったと後悔するなら、やって失敗した方がいいじゃないかと思っています。会社員時代は、行動してからのことの重大さに気がつくこともよくありましたが、いつも何とかなっていました。

興味のある方はぜひ連絡ください。一緒にドローンを飛ばしましょう。

「なんとかしたい」「やってみたい」

インタビューをした皆さんが口をそろえておっしゃる言葉です。
その行動力、気持ちはどこから生まれてくるのでしょうか。

つながりが生み出すものとは…

人と人との出会いは、新たな挑戦への意欲や生きがいを育みます。人と人とのつながりは、一人では生み出せない新たな価値を育みます。

異なる人生経験や価値観に触れることで視野が広がり、「なんとかしたい」「やってみたい」という思いが生まれます。そして、その思いはボランティア活動や地域活動、子どもたちとの交流など、地域社会での実践へとつながっていきます。

こうした活動は、地域に新たな担い手を生み出すだけではありません。子どもや若い世代との交流を通じて世代を超えた信頼関係が育まれ、地域のつながりが深まり、誰もが安心して暮らせる地域づくりにもつながります。

また、地域で役割を持つことは、活動するその人自身にとっても大きな価値があります。「誰かの役に立っている」実感は、自分らしく活躍し続ける力となります。

一人ひとりの楽しみや経験を生かした活動が地域の力となり、またその喜びが自分を元気にしてくれるという好循環を生み出していきます。つながりは、人を元気にし、地域を元気にし、未来へ受け継がれる地域の財産となる。「レイカディア」を育む人たちが教えてくれる大きな価値です。

しがの健康とスポーツ
フライングディスク

滋賀の健康寿命は全国でもトップクラス。人生100年時代の人生を豊かに過ごすには健康寿命を延ばすことが重要です。この連載では、障害者スポーツやニュースポーツなど、「スポーツ」に熱い思いをもって取り組む方をピックアップし、スポーツを通じて人生を豊かに過ごすヒントを探ります。



滋賀県フライングディスク協会
会長 早川 浩一さん

滋賀県出身の早川さんは、東京での会社員時代、フライングディスク協会の会長であった妻の恩師から、滋賀で協会をつくるように言われる。滋賀に帰り、協会を立ち上げて25年。今では自ら大会を主催し、選手としても出場している。

手を離れたフライングディスク（フリスビー）が80メートル先のゴールに向かって、飛んでいく。時にはディスクがカーブを描き、障害物を避けてゴールに向かう。フライングディスクには、12種目あります。アルティメット（アメフトのフリスビー版）とディスクゴルフのどちらをやるか迷いましたが、アルティメットはハードなので、ディスクゴルフをやり始めました。ディスクゴルフは、ゴルフボールの代わりにフライングディスクをゴールに入れる投数を競うスポーツ。ディスクを投げることさえできれば子どもから高齢者まで誰でも楽しめます。

思ったコースにディスクが飛んでいったら最高に気持ちいい。そして、ディスクにしかない浮遊感があって面白い。なにより、メジャーじゃないからみんな始めた時のスタートラインが同じ。一緒に成長していける。その上、技術的なものもあり奥が深く、体力的な負荷がそんなにないので、自分の体力に合わせて長く続けられる。シニアの方も活躍できるスポーツとしてうってつけだと思います。また、競技人口が少ないこともあって大会となれば、全国からプレイヤーが集まり、全国の人と友達になれます。全国のプレイヤーの半分くらいは知り合いだと思います（笑）。さらに個人競技だから、自分の失敗でチームに迷惑をかけたらどうしようと思い悩むこともありません。

中部・関西の大会は制覇したので、目標はまだ出ていない大会で優勝することです。遠征のついでに観光もするので、それも楽しみのひとつです。遠くへ行けることは、人生の中で宝物になっています。妻は15年前に亡くなっているのですが、妻がきっかけで始めたことを続けていくことで、妻もずっと一緒にいるような気持ちにつながっています。

えにしのたね　えにしのめ

福祉現場の気づきから実践へ

現行の制度で解決できない生活課題、地域の福祉課題に気づいた「滋賀の福祉人」たちが、課題解決に向けて実践しているさまざまな取り組みをご紹介します。

世代を超えて「寄れる場所」

とよさとまちづくり委員会
×
とよさと快蔵プロジェクト
×
あすなろ福祉会



豊郷町では、使われなくなった古民家や蔵を改修し、住民のつながりに生かす活動が長年続いています。滋賀県立大学の学生でつくる「とよさと快蔵プロジェクト」と町民有志のNPO法人「とよさとまちづくり委員会」、そして社会福祉法人「あすなろ福祉会」がそれぞれに役割分担してきた新しい福祉のかたち。住民が互いに支え合う取り組みについて、活動に携わるみなさんに聞きました。

左上写真は、あったかほーむ「おこうさん」の玄関先にて。左から順に今回の取材にご協力くださったとよさとまちづくり委員会事務局の清水ちあきさん、同委員会副会長の前田広幸さん、とよさと快蔵プロジェクトの代表仲埜萌花さん・坂本卓弥さん。

たね　使われなくなった空き家は100軒　誰もが「寄れる場所」を求めていた

豊郷町で古民家活用の取り組みが始まったのは、2000年頃。青年団や婦人会など、昔ながらの助け合いが衰退する中、当時の町長の呼びかけで、地元の若者たちが月に一度公民館に集まり、「地域のために何ができるか」と話し合いを重ねていました。

そこで話題に上がったのが、空き家でした。多くは持ち主が都会に出て戻る見込みのない家や蔵。「とよさとまちづくり委員会」に立ち上げから関わる前田広幸さんは「空き家を活用し、自分たちが寄れる場所をつくりたい、という気持ちが高まった」と振り返ります。手始めに解体寸前の蔵を預かり、水回りを修繕。隣接する場所には役場が公衆トイレを整備してくれ、最初の拠点「辻長蔵」が息を吹き返しました。

しかし活動を進める上で、多額の改修費用が課題になりました。前田さんたちは持続的な活動を目指して法人化し、資金集めに奔走しましたが苦戦続きでした。

そんな中で出会ったのが、滋賀県立大学で環境・建築デザインを学ぶ学生たちです。「空き家の解体作業を手伝ったのがきっかけでした」と話すのは、卒業生で発起人の竹岡寛文さん。「作業後の飲み会で、町内に空き家が100軒あると知り、改修に携わる学生を集めようと『とよさと快蔵プロジェクト』を立ち上げました。でも当初は全然集まらなかったですね」。その後、少しずつメンバーを増やし、大学の支援を受けて空き家改修を軸に豊郷町を盛り上げる計画が進んでいきました。はじめの数年は、改修した家を学生シェアハウスとして活用し、大学生が町内に暮らし始めました。

この頃、豊郷町ではもう一つの問題が持ち上がっていました。一人暮らしの高齢者たちの行き場のなさです。そこで立ち上がったのが、社会福祉法人「あすなろ福祉会」理事長の故・浅居茂さんでした。



あったかほーむ「恭やん邸」に集まって干し柿づくり。
冬の恒例行事となっている。



高齢者も学生も地域の子どもたちも、みんながリラックスしてくつろぐリビングのような場所。
あったかほーむ「おやえさん」のなんでもない日常の一幕。

め　若者の家であり、高齢者の通い場　医療費の削減や孤立防止にも

一人暮らしの高齢者たちは、病気でもないのに毎日病院に通っていました。その背景を知るため、あすなろ福祉会がアンケート調査を行ったところ、「どこも悪くないけど、一人になって暇やし、寂しいから病院に行く」といった声が多く集まったのです。当時は後期高齢者の医療費が実質無料だったこともあり、病院が交流の場となっていました。病院以外の行き場のなさが、そのまま地域の医療費の増大につながっていたのです。

高齢者の行き場のなさと、町内の空き家再生の取り組みを知った浅居さんは、「高齢者の寄れる場所ができたら、病院に行かんでも済むし、孤立も防げる」と考えました。そこで滋賀県に相談し、「空き家を福祉目的で改修すれば助成が出る」という制度が生まれます。空き家が生まれ変わって地域の人たちの居場所となり、医療費の抑制にもつながる。そんな発想から生まれたのが滋賀県の「あったかほーむづくり事業」でした。

「とよさとまちづくり委員会」、「とよさと快蔵プロジェクト」、「あすなろ福祉会」の三者が連携し、空き家を活用した福祉の取り組みが進んでいきました。当初は県のモデル事業として始まり、やがて豊郷町の宅老所事業として広がっていきました。

空き家の改修は学生たちが中心となり、完成後はシェアハウスとして学生や卒業生が家賃を払って暮らします。建物の一部は高齢者が日中無料で過ごせる居場所として開放し、水光熱費などは住人の家賃でまかないます。若者にとっては格安で住まいが手に入り、高齢者にとっては無料の居場所ができる。鍵を開けたりお茶を入れたりする高齢者（当番）には、必要な活動費が支払われ、みんなが支え合う合理的な仕組みでした。

さらに2006年には、とよさと快蔵プロジェクトの活動として空き蔵を改修した「Barタルタルーガ」も誕生しました。当時、町内には仕事終わりに住民や学生が気軽に飲食できる店がありませんでした。そこで、使われていなかった蔵を学生たちが自力で改修し、バーとしてオープンさせたのです。学生がスタッフを務め、週末を中心に営業しています。地元の農家から仕入れた食材や、地元名産の馬肉燻製「さいぼし」などを提供。夜になると近所の農家や商店主、高齢者から若者までが集い、カウンター越しに会話を弾ませるようになりました。



受け継がれる支え合いのバトン
日常が見守りのネットワーク

プロジェクトが始まって20年以上が経過した今、宅老所付きシェアハウス「あったかほーむ」は町内で4軒運営され、とよさと快蔵プロジェクトの学生も代々バトンを受け継いできました。

あったかほーむの日常には、福祉サービス特有の堅苦しさはありません。近所の高齢者たちが気軽に集まり、お茶を飲みながら世間話をしたり、テレビを見たり、思い思いに過ごしています。特別な安否確認システムはなく、定期的に顔を合わせて言葉を交わす日常そのものが、自然な見守りネットワークとなっているのです。



Barタルタルーガのカウンターにて。
地元のお客さんと学生スタッフ。

あったかほーむに暮らす学生と高齢者との間にも、家族のような温かい関係が育まれています。この夏から居住を決めたプロジェクト代表の坂本卓弥さんは、「出身地の大阪にはない地域の方々との交流を楽しみたくて」と動機を語ります。また、とよさと快蔵プロジェクトOGで卒業後もあったかほーむに暮らす吉田瑛里奈さんは、「自分たちが見守っているというより、野菜をいただいたり、柿の保存法など昔ながらの生活の知恵を教わったりして、助けられていることの方が多い」と話してくれました。

一部のあったかほーむで開かれる子ども食堂や学習支援には、地域の小学生から高校生も訪れます。関わりが深まるうちに、子どもたちが学校や家庭では言えない悩みを打ち明けてくれることもあると言います。

「Barタルタルーガ」もまた、地域の大切な情報拠点として機能し続けています。「〇〇さんが階段から落ちてけがしたらしい」などの雑談が、一人暮らしの高齢者の状況を把握する貴重な情報源となり、困りごとの早期発見にもつながっています。

人の温かさに触れた学生の中には、大学卒業後も豊郷町に残り、町役場や地元企業に就職するなど、町とのつながりを持ちながら暮らし続ける人が何人もいます。とよさとまちづくり委員会と学生たちの協働も、今なお続いています。

空き家を学生と地域の手でよみがえらせ、高齢者の居場所をみんなでつくり、日々の暮らしの中で自然な見守りを育む。空き家を活用した取り組みは、無理のない共助の仕組みとして、豊郷の町に静かな活気をもたらし続けています。



とよさと快蔵プロジェクトの学生による改修作業の様子。
建物の改修だけでなく、家具の製作などにも取り組んでいる。



Recommended Movies & Books
おすすめの映画と本

MOVIE 90メートル

<あらすじ>
難病を抱える母と暮らす高校3年生の息子は、母の介護を担いながら進学への夢との間で葛藤していた。ケアマネジャーやホームヘルパーによる在宅支援が整う中、母子それぞれが未来への一歩を悩みながらも模索する感動作。

本作は、監督自身の介護の実体験をもとに制作された作品です。ヤングケアラーが抱える厳しい現実だけでなく、ケアマネジャーやホームヘルパーなどの専門職の支援、そして周囲の人とのつながりが、親子の暮らしや関係性を少しずつ変えていく様子が丁寧に描かれています。専門職の関わりは、生活を支えるだけでなく、親子が互いに「母」と「息子」として向き合える時間を取り戻す力にもなっているように感じられました。福祉の仕事は、その人らしい暮らしと家族の絆を支える仕事であることを改めて実感できる作品です。

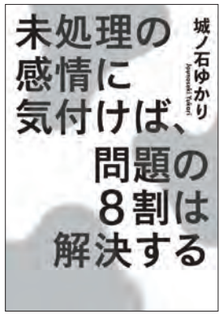


『90メートル』Blu-ray&DVD発売中 ／ Blu-ray：6,380円（税込） DVD：5,280円（税込）
発売元：クロックワークス ／ 販売元：TCエンタテインメント ／ ©2026映画『90メートル』製作委員会

BOOK 未処理の感情に気付けば、問題の8割は解決する

著者：城ノ石ゆかり／出版社：実業之日本社

<あらすじ>
自分でも気づかないまま心に残っている「未処理の感情」。それが日々の悩みや人間関係にどのように影響しているのかを、身近な事例やワークを交えながら解説し、自分の感情と向き合う方法が紹介されています。



心が疲れるたびに、気持ちの切り替え方や、うまく対処する方法を探していた頃、SNSでふと目にしたこの本のタイトルに、「もしかしたら、これかもしれない！」と手に取りました。それから約10年、今も本棚に置いているバイブルのような本です。見出しや気になるところから読むだけでも日常に活かせるヒントがあり、以前なら心がざわついていたような出来事も、今では「問題」と感じることそのものが少なくなりました。人間関係に悩んだり、心が疲れたりする方に、おすすめです。

BOOK 未来へつなぐ福祉滋賀

編集・発行：社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会

<あらすじ>
**「福祉滋賀」とは―。
本書は、滋賀の積み重ねてきた福祉実践の歴史をわかりやすく伝えるとともに、今を生きるみなさんへのエールでもあります。今伝えられることを大切に、みなさんと未来につなぐバトンとなる一冊です。**



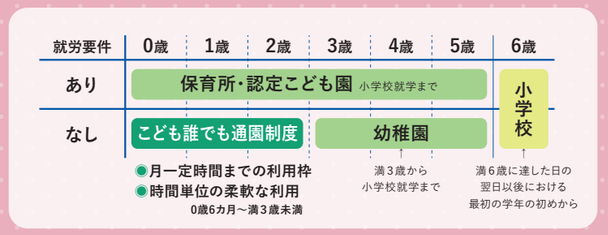
ページをめくると、実践者たちの語りの向こうに、心と思いのこもったたくさんのひとと、温かい「いのち」が登場します。「福祉滋賀」の歩みを、時代や歴史的な背景とともにわかりやすく学べることはもちろんですが、読み進めながら、自分なりに「感じる」ことで大切な「気づき」に出会えます。そして、福祉人の根っこの一部となるのではないでしょうか。また、現代に活躍する福祉人のコラムも読みどころです。

福祉の政策と生活

Social welfare policy and life

#08_こども誰でも通園制度

「こども誰でも通園制度」は、保育所等に通っていない0歳6カ月～満3歳未満のこどもを対象に、保護者の就労要件を問わず、月一定時間まで保育所等を利用できる制度です。こどもの成長を支えるとともに、保護者の孤立や育児負担を軽減し、すべての子育て家庭を支援することを目的として令和８年度より全国で実施されています。



こども家庭庁成育局保育政策課(2026)こども誰でも通園制度　基礎資料を元に作成

「こども未来戦略(令和５年12月22日閣議決定)」において、０～２歳児の約６割が「未就園児」であり、そうした子どもを持つ子育て家庭において「孤立した育児」の実態が見られることが示されています。「こども誰でも通園制度の制度化、本格実施に向けた検討会」においても、「孤立した育児」の中で子育て家庭が抱える不安や悩みが取り上げられ、子育て家庭への支援の強化が求められてきたところです。

そこで、新たに創設されたのが「こども誰でも通園制度」です。「全てのこどもの育ちを応援し、こどもの良質な成育環境を整備するとともに、全ての子育て家庭に対して、多様な働き方やライフスタイルに関わらない形での支援を強化すること」を目的として掲げ、2026(令和8)年4月に全国で本格的に実施されました。本県では、2026年8月現在、19市町43施設にて実施されています。

こども誰でも通園制度は、保育所や認定こども園等に通っていない生後６カ月から満３歳未満の子どもを対象に、月一定時間の範囲内で利用できる新たな通園制度です。現行の幼児教育・保育給付とは別の就労要件を問わない制度として位置付けられ、時間単位で柔軟に利用することができます。本事業は児童福祉法(昭和22年法律第164号)における「乳児等通園支援事業」として、子ども・子育て支援法における「乳児等のための支援給付」として規定されました。これにより、一定の権利性が生じるとともに、全国の自治体にて共通で実施することとなりました。

本事業は子どもにとって、家庭とは異なる環境の中で新たな経験をし、また広く他者と関わる機会が確保されることで、ものや人への興味・関心の広がりや社会情緒的な発達が期待されるなど大きな意義があります。保護者にとっても、専門的な知識を持つ保育者と関わる機会を得ることで、孤立感や不安感を解消し、子どもの成長を客観的に理解することができるなど、親としての成長の促進や必要な支援へのつながりが期待されます。子どもだけでなく保護者、さらには専門性を広く発揮できる保育者や、新たな役割や可能性を見出せる事業者にとっても意義深い事業となっています。

令和８年４月から実施が開始された本制度ですが、４月時点では利用人数が少なく感じられたものの、その後は県全体として増加傾向にあり、制度周知や体制の整備が進んできたように思います。しかし、利用が増えるにつれ、募集枠が埋まってしまい新規募集を停止している施設が生じるなどの課題も見られるようになってきました。

待機児童も発生している中、保育人材を確保し、十分に事業を実施していくことは容易ではありませんが、前述したような本事業の意義に照らし、全ての子どもの育ちを支えるため、引き続き、県としての役割を果たせるよう努めてまいります。

(滋賀県子ども若者部　子育て支援課)



地域の拠点として、すべての親子に「ほっとできる場所」を

社会福祉法人絆敬会　ここのっす園　園長　菊田 津多江さん

ここを「地域の親子の居場所・拠点」にしたい。そんな強い願いから、当園はこの制度に手を挙げました。子どもだけでなく、お父さんやお母さんも「ほっとできる」場所でありたいと考えています。

本事業を行う上で最も大切にしているのは、短時間の利用でも、子どもが安心できる「愛着関係の構築」です。子どもが通園してきた時に、知っている人が必ずいる状態をつくるため、当園ではこの事業専任の職員を配置しています。また、この制度を利用するお子さんを「チューリップ組」という一つのクラスの仲間として迎え、専用の下駄箱やマークを用意しているのも、親子に「ここに所属している」という安心感を持ってほしいという思いから生まれたものです。

運用を始めて実感しているのは、この制度は単なる預かりの場ではなく、集団生活を通じた子どもの自己肯定感の育成はもちろん、面談を通じて保護者の悩み(離乳食や発達への不安など)に寄り添う、「家庭支援の入り口」としての重要な意義を持っているということです。日々の面談や送り迎えの際の何気ない会話から、保護者の不安に寄り添うことができます。このことは、密室育児による孤立を防ぎ、虐待予防や適切な発達支援につながる大切な一歩だと確信しています。

今後、たくさんの保護者にこの制度を知っていただき、利用手続きの手軽さや、子どもを預けることに対して気兼ねなく利用できるような啓発が重要ではないかと思います。保育所や認定こども園を「働く親のためだけの場所」から、地域すべての親子を支える「セーフティネット」へ。私たちは、その拠点として、これからも歩んでいきたいと思っています。



2時間のゆとりが、私と子どもの笑顔を増やしてくれました

利用保護者(2歳児のお母さん)

私は今、月10時間の枠を4週に分けて、1回2時間を基本として子どもを預かっていただいています。たった2時間と思われるかもしれませんが、その間に「1人でゆっくり買い物ができる」ことが、どれほど身体的にも精神的にも助けになっているかわかりません。ずっと家で子どもと2人きりで過ごしていると、どうしても社会から切り離されたような、行き詰まった感覚になることがあります。そんなとき、先生という「大人の人」と話せる機会があるだけで、本当に心が軽くなります。

子どもの変化にも驚いています。家で親子2人だけで遊ぶよりも、園で他の子たちと交流することが良い刺激になっているようです。園の近くを通るとうれしそうに指を指したり、「明日は先生のところへ行くよ」と伝えると、楽しみにしたりしています。また、園で思い切り遊んで帰るとぐっすりお昼寝をしてくれて、良い生活リズムもできました。スマホで簡単に申し込めるネット予約の手軽さも、忙しい育児中にはありがたいポイントです。

この制度のおかげで、私は「一人じゃない」と感じることができました。もっと多くのお父さんやお母さんがこの制度を知り、孤独な子育てから解放されて、親子で笑って過ごせる時間が増えることを願っています。



わたしとふくしのはなし

福祉に関わる方が
どのような想いを持っているのか。
このコーナーでは、普段なかなか
〝聞けない声〟〝届かない声〟に
焦点を当て、さまざまな立場から
福祉に関わられている方の
想いを伝えていきます。

看護師から建築士という
異色のキャリアチェンジを果たした市川さん。
医療・福祉と建築をつなぐ役割や
福祉への想いについてお聞きました。





有限会社 市川工務店
建築士 **市川 真理**さん

学校卒業後は、看護師として働いていました。結婚を機に建築の仕事を始め、二級建築士、福祉住環境コーディネーターなどの資格を取得し、看護と建築、両方の知識を持つ自分だからこそできる仕事を手掛けています。「知識を十分持っていても、人を理解していなければ、建築の世界も医療や福祉の世界も通用しない」という持論があります。

看護師から建築士へ

看護師時代は、総合病院の外科系病棟で働いていました。30歳手前になり、管理職の話が出たり、内科への異動を打診されたりするようになって、燃え尽き症候群のような状態で、結婚を機に職場を離れました。その後、個人医院で看護師を続けながら、夫の建築の仕事を手伝うようになりました。

最初はインテリアやキッチンまわりの細かい相談に乗る程度。その中で、女性のお客さんが一生懸命話しても、男性の設計士にはうまく伝わらないことが多いと気づきました。「私も建築を学んでみたら面白いのでは」と感じて、本格的に建築の世界に入ろうと思ったのです。

インテリアコーディネーターの資格を取りましたが、基礎工事から始まる家づくり全体を知らずに関わるのは、現場で働く職人さんたちに失礼だと思い、勉強して試験を受け、実務経験を積み、2003年に建築士の資格を取得しました。

医療と建築、実は似ている

福祉に関わるようになったきっかけは、介護保険制度ができたことです。高齢者住宅の段差解消や、手すりの設置といった相談が増え、「どうつけていいのかわからない」という声もある中で、医療と建築の知識を持つ自分だからこそできることがあるのではないかと感じました。「私は、こういう仕事をやりたかったんじゃないか」と思えるようになったのです。

医療と建築の仕事は実はよく似ています。医療では患者さんがどう生きてきたか、今の症状に至った経緯を丁寧に聞き取ります。建築でも、これまでどんな暮らしをしてきたのか、今の暮らしで何が不便でどんな家に住みたいかをまず聞きます。そこから計画を立てていく。その過程は、看護計画も新築や改修のプランニングもよく似ています。

自分ひとりだけではできず、いろいろな職種の人がチームで関わる点も同じ。「全然違う世界で大変ですね」と言われるけれど、どちらも目の前の人のために何ができるかを考えて動く仕事です。

何度も同じことを口にするお客さんがいれば、無意識だったとしても実は本人のこだわっている点。「3回言われたら、それは大事なポイントだ」という感覚は、看護師時代のヒアリングの時から、変わっていません。

「通訳」がいない世界の橋渡しを

介護保険ができた当初、多くの建築士が福祉に関わろうとしました。たいだ、手すり1本の相談では割に合わず、やりがいを見出せずに離れていった人も少なくありません。医療・福祉と建築の距離感はなかなか近づかず、今もあまり変わっていないと感じます。

福祉の側からすれば、建築業界の人たちは「杓子定規」に見え、建築士からすれば、福祉業界の人たちは「無理難題を言ってくる」、そんな印象があるのかもしれません。

手すりの「高さ」ひとつをとっても、医療・福祉の側は、「使う人にとって高い」と感じ、建築士は「これが標準の高さだ」と思う。誰にとっての標準なのか、目の前にいる人がどんな人なのかを踏まえなければ、そのすれ違いは永遠に平行線のままです。それぞれの業界で共通言語になっている専門用語を、互いにわかる言葉に置き換えて橋渡しする「通訳」のような役割が、決定的に足りていないのです。

障害者福祉の世界に関わるきっかけがあり、障害当事者が建築のことを話す場に参加するようになりました。そこで学んだのは、「障害のある人」といっても価値観は一人ひとり違うということです。車椅子ユーザーだけでなく、全盲の人もいて、一括りにはできない。特別扱いしてほしい人もいれば、それを嫌う人もいる。結局は「一人ひとりをどう見るか」に尽きるのです。

福祉住環境は特別なものではない

心がけているのは「段取り八分」という言葉です。工事の質の8割は準備の段階で決まるという意味です。準備段階で施主の表情や小さな一言を聞き逃さず、不安を取り除く。安心と信頼を積み重ねることが、良い仕事につながると考えています。

私にとって福祉住環境は、特別なものではありません。障害の有無にかかわらず、住環境は誰もが等しく持っているテーマで、対象となる人がどんな人かによって、必要な知恵や工夫が変わるだけ。だからこそ、日々の情報収集と学びが欠かせません。

大事なのは、「その人にとっての幸せが何か」を理解することです。そのために、たくさん引き出しを持っていたい。「知らない」と言いたくないし、知ったかぶりもしたくない。日々学びを続けている原動力は、そこにあります。

今後、建築士の新しい職能として、「橋渡し」や「通訳」ができることが、ますます必要とされていくでしょう。ただオーダーを受けて図面を見て、自分の得意な家を建てるだけでなく、多様な人たちのニーズに応えられる建築士の存在が重要になります。

だからこそ、この先は、建築と福祉・医療をつなぐ人たちを増やすことにも力を入れたい。それぞれの業界の専門知識を伝わる言葉に変えて、返していける人材を増やしていきたいです。

国も、当事者が参画する会議の場でファシリテーターができるような人を必要としています。医療や福祉のことを理解して動きたいと考える建築士もいます。橋渡しできる仲間とともに、「多様な人を理解してニーズに応える」建築士の重要性を広く発信していくこと。それが、これからの私の役割だと思っています。



図面を描くだけにとどまらず、
現場での作業にも積極的に
出向く市川さん。

福祉を身近に、自分ごとに。

私たちのふくしゴト

子ども・若者がつくる滋賀の福祉とつながり

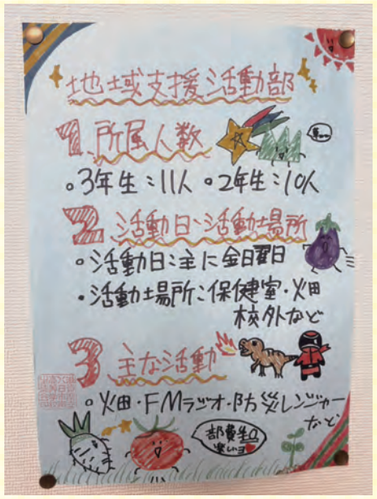
滋賀県立八日市南高等学校
地域支援活動部

能登半島地震の被災地支援をはじめ、園児や高齢者施設向けの防災劇「防災啓発レンジャー」、子ども食堂への野菜提供、ラジオ放送など幅広く活動。「主体性」を大切に、世代を超えた交流を通じて誰もが暮らしやすい地域づくりに貢献する部員の皆さんに、活動の魅力や得た気づきを語ってもらいました。





普段の活動の様子



「誰かの力になりたい」という純粋な思いがきっかけ

――入部のきっかけを教えてください。

Aさん 私は中学の頃からボランティアに興味がありましたが、どこに行けばできるのかがわからず、やりたいけどなかなか動き出せずにいました。そんな中、高校を選ぶ時に、八日市南高校の地域支援活動部の活動を知る機会があり、「この部活に入りたい」という強い気持ちが芽生え、入学を決めました。また、入学した年がちょうど能登半島地震の年で「自分も何か力になりたい」と感じたのも入部を決めたきっかけのひとつです。

Bくん もともと農業に興味があって農業科で学んでいるので、子ども食堂への野菜提供や授業で扱わない野菜づくりの話を友達から聞いて入部しました。私以外にも、部員から活動の様子を聞いて、興味を持ち、入部に至るケースは多いです。

――実際に活動してみていかがですか？

Aさん 地域のいろんな世代の人と交流でき、部内も先輩後輩関わらずみんな仲良く活動しています。SNSでの発信など、生徒発案で実現した取り組みもあり、やりたいことをできる環境もありがたいです。

Bくん 高齢者施設や子ども食堂など、これまで関わったことや足を踏み入れたことのない場所などにうかがい、初めて知る世界が多くて面白いです。

被災地で知った「人の温かさ」と「一歩の勇気」

――特に印象に残っている活動は？

Cくん 園児向けの劇「防災啓発レンジャー」です。「だんごむしのポーズ」で身を守る方法を伝えるのですが、悪役として登場した時の子どもたちの素直な反応や笑顔を見ると、心からやりがいを感じます。

Aさん 私は能登半島地震の被災地支援です。半年経っても道路はボコボコのままで、テレビの映像で理解はしていましたが、自分の目で見て確かめることは大切だなと思いました。仮設住宅を訪問した時、最初は「迷惑じゃないかな」「冷たくされないかな」と、チャイムを押す手が震えるほど緊張して……。勇気を出して声をかけると、皆さん本当に温かくて。「遠いところからありがとう」と涙を流して喜んでくださり、私たちが助けに行ったはずなのに、最後には両手にいっぱいで持ちきれないほどのお土産をくださいました。私自身が救われた気持ちで、「人って温かいな」と肌で感じた瞬間でした。



幼児園や高齢者施設への
防災レンジャーの出張

「自分」から「誰か」へ活動がくれた心の変化

――活動を通じて起きた自身の変化は？

Aさん 元々は人前で話すのが苦手でしたが、前に出る機会が増え、今では部長として主体的に動けるようになりました。

Bくん 「相手の立場を考えて行動する」習慣が身につき、日常でも周りに気を配れるようになりました。

Dくん 自分に自信がつき、人と関わる楽しさを知りました。将来どんな仕事に就いても、アイデア次第で地域づくりに関われると学べたのも大きいです。

10年後、私たちが創りたい社会

――10年後の理想の社会とは？

Aさん 地域の防災意識を高める情報共有の場が増えてほしいです。また、ネットの言葉も含め、自分の発言が与える影響を考えられる大人が増えてほしいと思います。

Cくん 地元の自然を守り、ずっと住み続けたい場所にしたいです。

Eくん 世代を問わず、些細な困りごとを気軽に相談し合える近所同士のつながりを大切にしたいです。今の自宅に引っ越したての時に、母親がゴミ捨ての場所がわからなくて困っていた姿を目の当たりにしました。こういう時に、相談できる人がいるといいのにな、と思ったのと同時に、近所づきあいや地域の人と関わる機会が少ないと、そういう存在も見つけられないだろうな、と感じました。

Bくん 社会全体が、周りの人に気を配れるだけの「心の余裕」を持てるようになればいいなと思います。日常でも、バスの中で周囲に迷惑をかけたり、配慮が欠けていたりする人に出会うことがあります。その時、嫌悪感が生まれる一方で、「もしかするとこの人は今余裕がないのかもしれない。生きるのに精一杯なのかもしれない」と思うことがあります。みんなが「心の余裕」を持てれば、もっと優しい社会や地域になるのではないかなと思います。

――最後にメッセージをお願いします。

地域支援活動部は、最高の団結力で活動しています！地域と交流できる部活動がめずらしい中で、この地域支援活動部は、世代問わずたくさんの人と関わりが持てます。いろんなことを教えてもらえて、自分たちもいろんな経験ができて、そのことが私たち自身の成長にもつながっています。まずは興味を持つことから始めてみてください。募金などの小さな一歩でもいい。行動に移すことで、自分自身も、そして地域もきっと変わっていきます。

私たちに興味や関心を持っていただいた方は、ぜひお声がけください！



県社協レポート

滋賀県社会福祉協議会では
「ひたすらなるつながり」の理念のもと、
福祉関係者や地域のみなさんとともに、
さまざまな事業を実施しています。
このコーナーでは本会の取り組みや
職員の思いを紹介します。

（レポーター：次世代ケア推進センター 糸谷素子）



次世代ケア推進センター

令和8年4月開設

誰もが健康に働き、質の高いケアが受けられる未来へ 次世代ケア推進センターの挑戦

社会構造の変化により必要な医療･介護ニーズは変化し続けています。今後は、これまでに福祉現場で積み上げてきたノウハウに加え、革新的な技術や先進的な手法を取り入れ、将来を見据えた「次世代ケア」について考えなければなりません。医療、介護、障害、いずれの分野においてもDX化や生産性向上の取り組みが進められています。次世代ケア推進センターでは、介助するだけでなく自立生活を可能にするケアを突き詰めて考え、**一人ひとりに合わせた支援**を探求します。

右ページ(p.19)に紹介する２つの事業を中心として、福祉用具のノウハウを活かした次世代ケアの推進を目的に、ケアの現場のお困りごとに対して、よりよい暮らしにつながる次のようなお手伝いをしています。

- ▶ 各種介護テクノロジー等の福祉用具を有する環境を活用した
  自立支援と負担軽減を両立するための専門職による見学･相談対応
- ▶ ケアのある生活やケアの現場の魅力を身近に体験できる機会の提供
- ▶ 関係機関の紹介･連携

また、これから介護･看護･医療職への従事を目指す専門職養成課程の学生等に、研修を通じて次世代のケアの考え方や技術等を伝えています。在宅の生活空間を想定した環境や介護テクノロジー等の福祉用具を活用し、実践的な体験学習の機会を提供しています。

滋賀県福祉用具センター(1997年1月～2025年3月)は、「ケアのある暮らし」と「ケアのある暮らしを支える人」を支援する次世代ケア推進センターへと生まれ変わりました。次世代ケアに関するさまざまなご相談を受付中。お気軽にお問い合わせください。

《次世代ケア推進センター》
https://www.shigashakyo.jp/kaigosupport/ →→→

滋賀県草津市笠山7丁目8番138号 県立長寿社会福祉センター別館
TEL 077-567-3907 月～金曜日 9～17時（土日祝・年末年始は除く）
FAX 077-567-3967 ✉ **kaigosupport@shigashakyo.or.jp**

コミュニケーションに困難のある方に対する
相談支援に用いる機器･用具



次世代ケア推進センターの核となる ２つの事業

滋賀県介護現場革新サポートデスク
［介護現場革新の推進に係るワンストップ窓口事業］

2024(令和6)年度より県の委託事業として、県内の介護サービス事業所を対象に、ケアの質向上と働きやすい環境づくりを支援するワンストップ相談窓口を運営しています。2026(令和8)年度からは、支援対象を障害福祉サービス事業所にも拡大しています。

「生産性向上の進め方がわからない」、「情報共有がうまくいかない」、「活用できる介護テクノロジーが知りたい」、「他事業所の改善事例を知りたい」などサポートデスク職員やしが介護現場革新アドバイザーなどが個別相談に対応します。その他、介護テクノロジーの導入支援、研修・体験展示の実施などを行っています。人材確保に関する相談や経営的な相談など、内容に応じて関係機関へおつなぎしています。お気軽にご相談ください。

ご相談は、左ページ(p.20)下部の次世代ケア推進センターまで。



しが介護テクノロジー展2026

ノーリフティングケアの推進
［抱え上げない介護推進事業］

滋賀県内における介護する側・される側のどちらにも優しいノーリフティングケアの普及を目指し、「抱え上げない介護」と名付け、2019(令和元)年度から「抱え上げない介護推進事業」を展開してきました。総論を学ぶ「入門研修」、事業所全体で取り組みを進める「実践研修」、取り組みを定着させるための「定着研修」を実施。全研修を修了し、地域で"実践を広げる"取り組みを継続する事業所を「抱え上げない介護推進事業所」として推奨しています（現在22事業所を推奨）。

2026(令和８)年度からは県委託事業として「抱え上げない介護推進事業」全体を実施しています。この事業は、労働安全衛生の観点から、施設のみならず在宅・地域ケアの場へと展開し、滋賀県全域の高齢福祉・障害福祉・医療の現場に着実に広がっています。

また、2027(令和9)年1月15日には、滋賀県米原市役所にて「ノーリフティングケア展」を開催いたします。



抱え上げない介護実践研修



大津市社会福祉協議会
井ノ口 浩士さん

しが
ふくし
福祉論壇
ろんだん

虫の目・鳥の目・魚の目＋〇〇目

社会福祉協議会（以下、社協）で仕事をして30年近くになります。振り返ると、高齢化や人口減少、地域のつながりの希薄化、そしてコロナ禍など、地域を取り巻く環境は大きく変わりました。しかし、どんな時代になっても変わらないものがあります。それは、人は人とのつながりの中で安心して暮らし、誰かとの関わりの中で生きる力を得るということです。

私が仕事をする上で大切にしている考え方があります。それは、「三つの目と、一つの目」です。

一つ目は「虫の目」。地域の中で困りごとを抱える一人ひとりの暮らしを丁寧に見る目です。目の前の小さな声や、言葉にならない思いに気づくことが、福祉の原点だと思っています。

二つ目は「鳥の目」。地域全体を俯瞰して見る目です。個々の課題だけではなく、地域にはどんな強みがあり、どんな人や団体が活動しているのかを知ることで、新しい支え合いの形が見えてきます。

三つ目は「魚の目」。時代や社会の流れを読む目です。地域課題は変化し続けています。これまでのやり方を大切にしながらも、新しい発想や多様な主体との連携を柔軟に取り入れていくことも必要です。

そして、もう一つ加えたいのが「結び目」です。社協の役割は、困りごとを抱える人に助けとなる制度を紹介することではありません。人と人、人と地域、人と活動を結び、新しい出会いを生み出すことにあります。一人では難しいことも、誰かとつながることで解決の糸口が見つかることがあります。その「結び目」をつくることこそ、社協だから果たせる役割ではないでしょうか。

私はこれまで、多くの地域住民やボランティア、学区社協、民生委員児童委員、自治会、福祉施設、行政そして関係機関の皆さんと出会い、支えられてきました。その中で実感したのは、「地域福祉は誰か一人がつくるものではない」ということです。一人ひとりが少しずつ力を持ち寄り、つながることで、地域は少しずつ豊かになっていきます。

滋賀には、人を思いやり、お互いを気に掛ける温かな風土があります。この大切な財産を未来へつないでいくためにも、社協は地域に寄り添いながら、多様な人や組織を結ぶ「結び目」であり続けたいと思います。びわ湖が県内の水を集め、それぞれの地域をつないでいるように、私自身も人と人をつなぐ存在になれるように努めます。

目の前の一人を大切にする「虫の目」、地域全体を見渡す「鳥の目」、時代の流れを読む「魚の目」、そして人と人をつなぐ「結び目」。この４つを心に留めながら、これからも誰もが安心して暮らし、「この地域で暮らしてよかった」と思える滋賀の地域福祉を、多くの皆さんとともに育んでいきたいと願っています。

くらしつなぐ　ひとをつなぐ　ちいきつなぐ
一般社団法人
滋賀県老人福祉施設協議会



くらしつなぐ
ひとをつなぐ
ちいきつなぐ

自然災害が多発し、それも一つひとつの事象が激甚化しています。
しかしながら、介護や福祉の仕事は、被災した状況下でもその営みを止めることはできません。
また、SOS が出ている被災地の福祉施設や避難所等への支援も欠かすことはできません。
最大のポイントは平時から、誰がどのように動くのか、準備をしておくことに尽きます。
非常災害時の司令塔など、迅速な体制構築も大きな鍵です。
当会としても福祉関係者とネットワークを形成し、あらゆる備えに取り組んで参ります。

当会は、養護老人ホームやケアハウス、特養など高齢者施設等を経営する
滋賀県内 95 の事業所により組織し、介護サービスを安定的に提供することで、
ひとりひとりの暮らしを支えています。
平和の意味を考え、そしてできることを考え、やり遂げる。
社会福祉法人として、役割を果たしていきます。

事務局
〒525-0072
滋賀県草津市笠山７丁目 8-138 県立長寿社会福祉センター内
一般社団法人　滋賀県老人福祉施設協議会
TEL. 077-585-9380　FAX. 077-585-9381
Email shiroukyo@shiga-roushikyo.jp　http://www.shiga-roushikyo.jp/